

[2] S.U.P. Version 2の英語の4技能における位置づけ

S.U.P. Version 2では、1年生をインプット重視の「形成期(Formation)」、2年生を創造・思考重視の「創造期(Creation)」、3年生を即興的なアウトプットの流暢さを重視する「加速期(Acceleration)」と概念的に位置づけて、シラバスの作成と指導を行った。

本研究は、「アウトプット(発信)型の能力」の育成、すなわちライティングとスピーキングをそれぞれ向上させることにより、相乗効果的に「効果的な発信能力」、「議論できる発信能力」へと総合的に向上することに焦点化している。したがって、「インプット(受信)型の能力」に関しては、本校におけるリーディングとリスニングの既存の指導方法・内容に関してさらなる発展を試みるものの、研究内容に関連しない分野についてはとくに取り上げない。

しかしながら、「アウトプット」の育成に関しては、図5 - 0 - 2 - 1のようにあくまでもその水面下に十分な「インプット」が備わっていることを前提とすることには違いない。

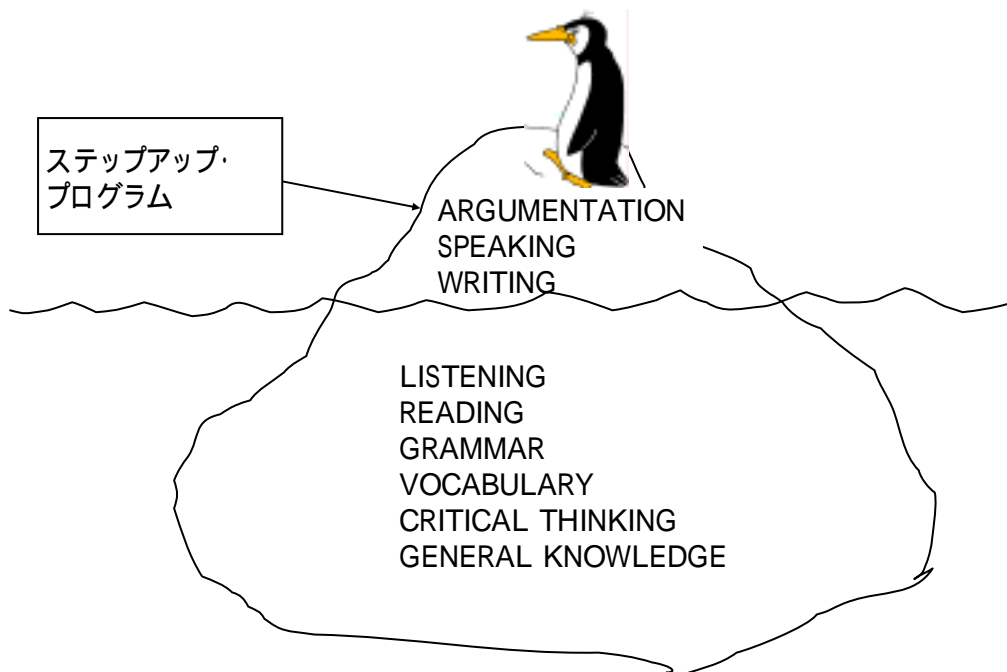


図5 - 0 - 2 - 1 . S.U.P.の前提となる「水面下の充実」のイメージ

S.U.P. Version 2に基づいてシラバスを作成する際に必要であったイメージは、図5 - 0 - 2 - 2のようなものであった。目標値と指導内容を構成する上で用いた「軸」は「インプット-アウトプット」と「文字 - 音声」の2つである。

「インプット」としての「音読」や「暗誦」を、そして「アウトプット」としての「即興」や「ライティング」を、それぞれステップアップという考え方に基づいて、どう段階的に目標設定し、どの時期にどのような内容を指導していくかである。

具体的には、S.U.P. Version 2これらのイメージにしたがって、外国語(英語)科の教諭13名で、12の科目についてシラバス作成を行った。成果として[資料1]に示す。とくにS.U.P. Version 2の計画に基づく部分には下線が付してある。また、目標値への到達度と指導方法・内容の適否については、指導者ごとに作成した「ステップアップ・レポート」に記す。

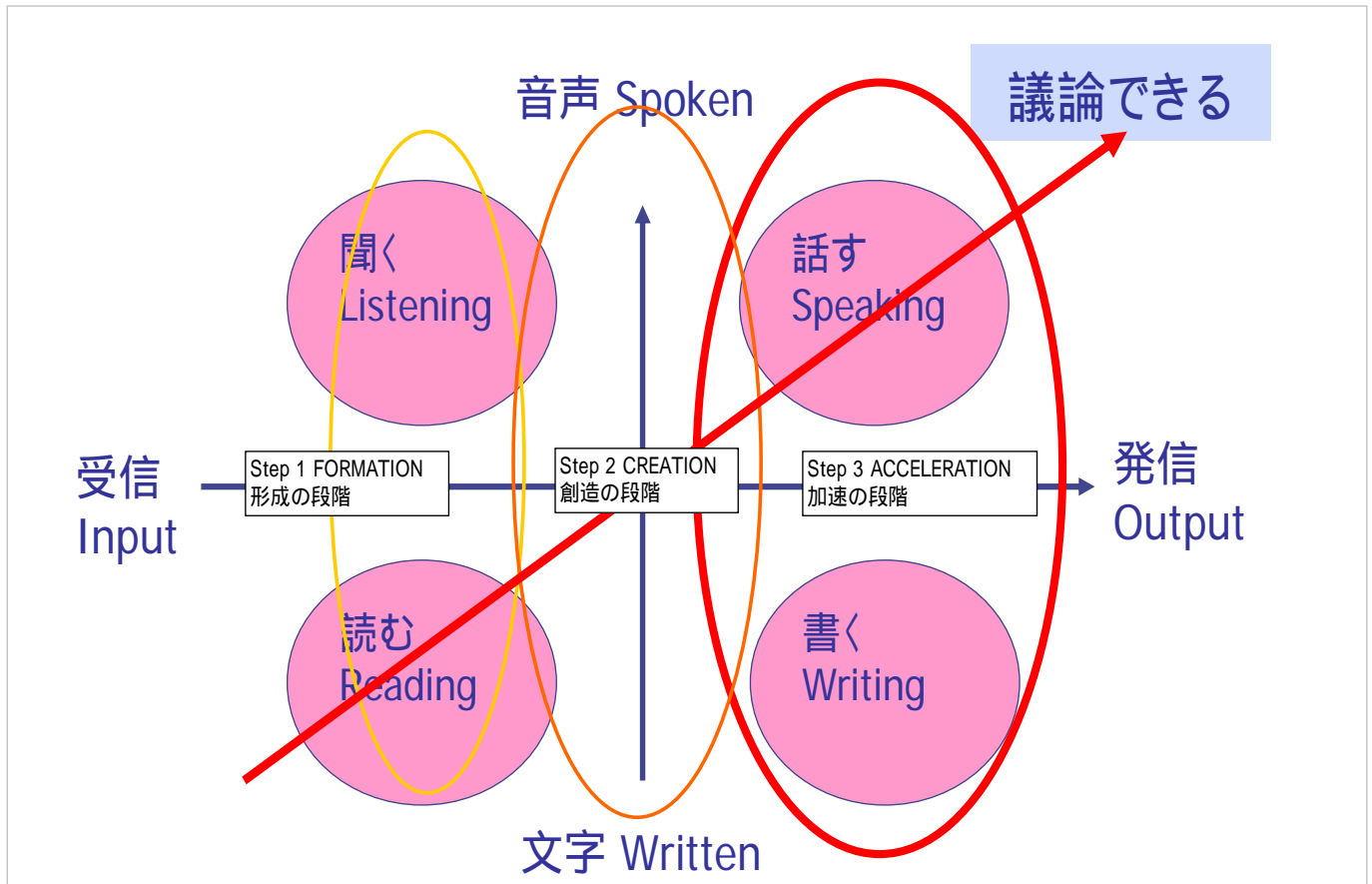


図5 - 0 - 2 - 2 . S.U.P.の英語の4技能における位置づけのイメージ

〔3〕「「負荷」の調節」 「議論できる発信能力」の前提となる「言語」と「意見」の位置づけ -

「話そうと思うのにことばが出てこない」、「何を話せばよいかわからない」、「話そうとすると頭が真っ白になる」といった生徒の「苦手意識」について調査した結果から、平成16年度(第一年次)の研究では以下の2点を留意して、指導することが必要と考察した。

「言語」 話す内容は思いつくが、それが英語にならない生徒がいる。

「意見」 話す内容がない、あるいはうまくまとまらない生徒がいる。

そもそも、「発信」に際して「話す内容が見つからない」ということは致命的である。したがって、上記のどちらの条件を無視しても、「議論できる発信能力」にはとうていたどり着けない。S.U.P. Version 2では、指導内容や扱う題材に関して、いくつかの異なる「負荷」を調節しながら与えることで、この点を克服しようとした。

「言語」 「流暢さ」の目標値をさまざまに設定して、異なる負荷を経験させながら向上を図る。

「意見」 「思考の必要性」をさまざまに設定して、異なる負荷を経験させながら向上を図る。

具体的には、 は、「音読」・「暗誦」・「即興」などの発信型活動に関して、流暢さの目標値(WPM)を学年別に設定し、授業内で「言語変換の負荷」を調節しながら、向上を図った。

また、 は、「昨夜自分がしたこと」や「この夏の過ごし方」など、既存の知識や経験に基づく自己関与の高い話題から、「携帯電話」や「インターネット」などメリット・デメリット、賛否両論があり、それについて少なからず「思考」する必要がある話題まで、授業内で「意見形成の負荷」を調節しながら、向上を図った。

〔4〕学習活動の2分類化 - 「イベント型」と「トレーニング型」の学習活動 -

「思うように英語が出てこない」という生徒の状況への対応としては、前節の「言語」で触れたように、「流暢さ」の目標値を様々に設定しながら、「音読」・「暗誦」・「即興」という3種類の「トレーニング型」活動を設定して指導を行った。

シラバスの作成に際しては、「イベント型」と「トレーニング型」を以下のように分類して位置づけた。

「イベント型学習プログラム」スピーチ、プレゼンテーション、ディベートなど「期間限定」で行う学習活動。「体験すること」を重視する。「期間限定」ではあるが、一過性のものとせず、ある一定期間をおいて順序よく体験させるという「スパイラル型」の指導観に基づく。

「トレーニング型学習プログラム」音読、暗誦、即興モノログ、即興ライティングなど「長期反復」で行う学習活動。「慣れながら向上すること」を重視する。「長期反復」とは、3年間を通して、すべての授業で毎時間、5分程度これを位置づけて行い、「流暢さ」をおもな指標として向上の程度を「生徒」と「教師」で共有しながらステップアップを図る。「英語の百ます計算」のようなイメージである。

上記、とも順を追うごとに「目標値」を徐々に上げ、異なる「負荷」を経験しながらステップアップできるよう配慮している。

また「SELHiだからできた」、「SELHiが終わったらもうできない」などとならないように、「今後も日常的に指導に生かせる」ことを念頭におき、授業科目ごとの指導の中で目標値の達成度や、指導法の適否をモニターしながら、「それぞれの工夫」を集積し、ステップアップ・レポートを作成している(下図に例示。)。

SELHi 研究特別活動の記録

担当教諭 西 巖弘 横山 直子

第 3 学年	国際コミュニケーションコース	科目名: 『コミュニケーション』
--------	----------------	------------------

【活動と目標値】(シラバスに掲載のもの)

トレーニング型	音読 * wpm	暗誦 * wpm	即興 75 wpm
イベント型	ライティング、ライティング・ディスカッション、トーキング・マッチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション		

【実践の記録】

学期	1学期	2学期	3学期
生徒の平均値	音読 * wpm	* wpm	* wpm
	暗誦 * wpm	* wpm	* wpm
	即興 67 wpm	70 wpm	93 wpm
トレーニング型	活動内容 1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)	1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)	1分間モノログ(自分自身の経験や展望) 2分間モノログ(賛否両論のあるテーマ) 5分間ライティング(上記と同じテーマ)
	工夫点・反省点 ・と で話題を変えて、知識・思考の異なる負荷を経験させた点。 ・ライティングの継続を意識した点。	・イベント型の活動に必要な時間を優先させたので、トレーニングの一部または全部を実施できない場合が半分程度あった。	・CT対策、二次対策などの入試対策が優先されるため、生徒のモチベーションが維持し難い。
イベント型	活動内容 簡易ディベートペアまたはグループでのディスカッション パブリック・スピーチ トーキングマッチ	トーキング・マッチ ディベート ディスカッション	ライティング トーキング・マッチ
	工夫点・反省点 ・ワークシートを評価の対象とし、授業参加の程度を自己記録で確認できた点。 ・トーキングマッチの練習法。	・トーキングマッチについては、モノログを発展させた形式に変更し、以前より生徒の発話量が増えた点。 ・ディベートの時間を機械表示にしてロスタイムがなくなった点。	・リスニング、ライティングなど実践的コミュニケーション能力に関連する入試問題を通じて、リアリティーを高めた点。
気づき	・ワードカウンターやテーブルコーダーを駆使して、スピーキングのピア・リヴィジョンをしてみてもよいかも。	・「加速」を実現した一方で、発話内容の向上がみられない。	・結果的には総合的に向上できた。しかし、「目標値を下回る生徒」、「向上がなかった生徒」への対処が今後の課題。

〔 5 〕 スモール・ステップでアップする - 負荷の種類と調節 -

S.U.P. Version 2では、「負荷の調節」を授業内で行い、さまざまな負荷を経験させることで、生徒が少しずつ自分の限界を乗り越えて、可能性を広げていくことを意図している。

そもそも調節できる負荷には、「量的な負荷」と「質的な負荷」の2種類が考えられ、どちらも授業内の活動において調節が可能である。

「量的な負荷」は、一定時間に「書く量」、「話す量」、「読む量」などの目標値を変えながら呈示することによって、またその逆に「話す時間」、「聞く時間」など継続時間の目標値を変えながら呈示することによって調節することができる。

「質的な負荷」は、考え方として量よりは難しい。それぞれの課題に内在する負荷の種類を分解してみる必要があり、「音読」、「暗誦」・・・と課題がステップアップしていくごとに「素材の難度の負荷」、「言語の負荷」、「記憶の負荷」、「時間の負荷」など新たな負荷の「種類」が追加される(下表を参照)。

このような点を考慮すると、授業内で行われるコミュニケーション活動が「何を指して行われるのか(目的)」も言うまでもなく非常に大事だが、あわせて活動を通じて与える負荷が生徒の実態と乖離してはならない。したがってスモール・ステップを念頭において、指導内容の実践と反省をしたい。

表 5 - 0 - 5 - 1 生徒にかかる負荷とトレーニング型の学習活動との関係

研究内容		表現の充実	表現の充実	「通訳する」	「書く」	「話す」	「議論する」
トレーニング		音読	暗誦	通訳	英作	即興	議論
負荷の種類	素材	適切な内容を含む長文	重要表現を含む短文	身近な話題	身近な話題	身近な話題	賛否両論ある話題
	言語						
	記憶						
	時間						
	意見						
	説得						

「通訳する」は、理論上はあり得るが、「他者の発言を解釈して言語変換する」というプロセスが、研究内容の一連の流れから異質であり、負荷も非常に大きいと考えて、研究内容に含まない。

〔 6 〕 「議論するための発信能力」をどう評価するか WSAテストの構成と研究における位置づけ

A. 「WSAテストとは？」 - WSAテスト(Writing and Speaking test for Argumentation)作成の意図 - WSAテストは、「生徒の英語による論証能力」と「研究開発の適否」の両方を評価するための指標として、平成16年度(第一年次)に作成を行った。

作成の基本的な方針としては、以下の4点を考慮した。

- 「一貫性」 1学年から3学年まで同一の指標で評価し、指導の成果を時系列で比較できること
- 「客観性」 数値化に際して採点者によるばらつきが少なく、絶対評価できること
- 「簡便性」 能力が評価される機会をできるだけ頻繁に与えることができること
- 「フィードバック」 技能向上のためのポイントを生徒が理解しやすいこと

具体的には、「議論するための発信能力」について、「『身近だが賛否両論のあるテーマ』について自分の考えを論理的に『書く力』と『話す力』と定義し、この定義に基づいて、ライティングとスピーキングの「流暢さ」、「正確さ」、「(内容)適切さ」の3つの指標を測定するテストである。

「テストの構成」と「実施の手続き」は、できるだけ日頃の学習活動と関連した形式となるよう配慮した。

まず、「身近だが賛否両論のあるトピック」について、150語のライティングを行った後、ライティングと同じ「トピック」について2分間のモノログを行う。ライティングの答えは「紙面」に、スピーキングの答えは「カセットテープ」に記録される。LL教室で1クラスの生徒が一斉に実施する。テストは約20分で終了する。

また、WSAテストにより測定する能力に関しては、上記を考慮して、「流暢さ」は1分間の産出語数とした。そして「正確さ」は、語彙と文法に分離し、誤文法率(誤文法箇所の総語数に占める割合)と、ライティングでは誤綴率(誤綴語の総語数に占める割合)、スピーキングでは誤発音率(誤発音語の総語数に占める割合)を設定した。加えて、「内容の適切さ」に関しては、産出された論拠ごとの論理性を0～3点で評価し、JTEによる評価とAETによる評価を統合する形式を採用した。

なお、WSAテストの妥当性と信頼性を検討した結果は、平成16年度(第一年次)の研究開発実施報告書の中で、既に報告してある。

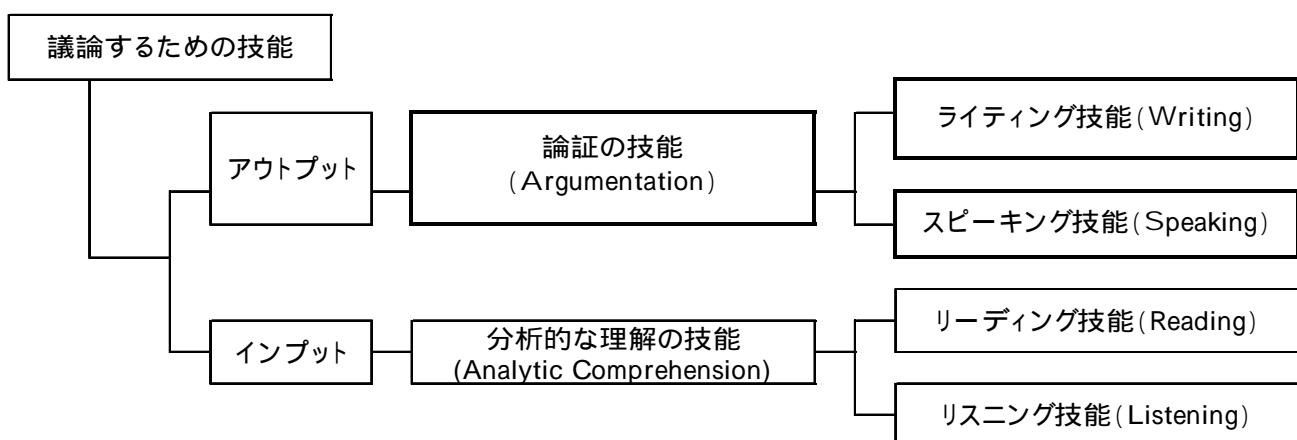


図5 - 0 - 6 - 1 . WSA テストのテスト内容の位置づけ

B. 「どのようなテストか」 - WSAテスト用紙 - WSAテストのサンプルは、下の図5 - 0 - 6 - 2に示す。おもて面はライティングの問題と答案、うら面はスピーキングの問題となっており、両面とも下欄に評価を書き込んでフィードバックする。

WSAテスト おもて

WRITING 15 minutes

Q: Write about 'Cellular phone', including two good points, two bad points, and your own opinion as a conclusion, in more than 150 words.

Q: 「携帯電話」について150語以上書きなさい。内容は、よい点とわるい点を2つずつあげて、最後に自分自身の意見を述べること。

Nowadays, many people have cell phones. They often talk with someone or sending e-mails with it. I think cell phones have both good points and bad points.

Cell phones' advantages are easy to carry and information which cell phone provides. If we have a cell phone, we can make a phone call anywhere and anytime. For example, even if we are in emergency we can ask for help by calling with cell phone. Also, cell phones gives us much information. We can book tickets with it and look for a hospital. These days, there are special cards, which can read by cell phones. So, cell phones are really useful.

But, they also have bad points. For instance, we have to use it carefully in public transportation such as buses or trains. Because there are people who have pace-maker, using cell phones harm their body. What's more, there are many bad groups, which demand wrong bill. Cell phones may invent bad effects.

In conclusion, I think cell phones are very useful and we can't live without it. But I think cell phone companies need to develop less damage cell phone for people who have pace-maker and propose the way to prevent crimes by bad groups.

3年 10組 名前 _____ Name _____

	N. of words	N. of sentences	Speed	Spelling errors		Grammatical errors		Logic	
				total	%	total	%	total	%
Coding	206	14	13.7	2	1.0	9	64.3	10	14
Evaluation	A・B C・D	.	.	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D
General Evaluation									
A・B・C・D									

205 words

うら

Q: Write about 'Cellular phone', including two good points, two bad points, and your own opinion as a conclusion, in more than 150 words.

Q: 「携帯電話」について150語以上書きなさい。内容は、よい点とわるい点を2つずつあげて、最後に自分自身の意見を述べること。

3年 10組 名前 _____ Name _____

	N. of words	Speed	Punctuation errors		Grammatical errors		Logic	
			total	%	total	%	total	%
Coding	166	83.0	0	0.0	5	3.0	5	7
Evaluation	A・B C・D	.	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D	A・B C・D
General Evaluation								
A・B・C・D								

図5 - 0 - 6 - 2 . WSAテストのサンプル(左おもて・右うら)

C. 「どう実施するのか」 - WSAテストの実施手続き - WSAテストの具体的な実施手続きは、下の表5 - 0 - 6 - 1に示す。表2は、LL教室でテストを実施する際の教示マニュアルである。

表5 - 0 - 6 - 1 テスト実施の具体的な手続き

	指示	機器の操作
0	(カセットテープに年、組、番、名前(日・英)を書かせ、録音のテストをする) (答案用紙を配る)	<u>のところで</u> (1)生徒は操作不可にする。 (2)一斉録音にし、生徒に声を出させる。 (3)巻き戻し再生して、聞こえることを確かめる。
1	これから、英語で「書くこと」と「話すこと」のテストを行います。	
2	テストは「書く」、「話す」の順に行われます。「書く」と「話す」のトピックは共通です。	
3	「書く」の制限時間は15分、「話す」は2分です。間に2分の休憩を取ります。	
4	「書く」は答案用紙に、「話す」は、ヘッドセットのマイクに、それぞれ答えます。	
5	「書く」「話す」とも、できるだけ「たくさん、正確に、論理的に」を心がけてください。	
6	解答中に辞書を使ってもかまいません。しかし、辞書を引く時間的な余裕はありませんので、この点をよく考えて使ってください。	
7	それでは、「書く」のテストをはじめます。「おもて」を開いて、指示に従って、英語を書いてください。START!	
8	(15分計時する)	
9	やめてください。テスト用紙はそのままにして、これから2分間、次の「話す」の準備をしても構いませんが、答案を変更してはいけません。	
10	(2分計時する)	
11	それでは、「話す」のテストをはじめます。「うら」を開き、指示に従って、英語で話してください。なお、「話す」途中で、 <u>他のページを見てはいけません</u> 。では、ヘッドセットを付けてください。START!	一斉録音のボタンを押す。
12	(2分計時する)	ストップウォッチの操作をする。
13	やめてください。テスト用紙を回収します。両面に名前があることを確認してください。以上でテストを終わります。ごろうさまでした。	録音を解除し、巻き戻す。

D. 「どう採点するか」 - WSAテストの採点方法 -

WSAテストの採点は、表3の一覧に示される採点者が手分けをして行う。表5 - 0 - 6 - 2の「適切さ」h.論理性については、もともと主観的な指標であるため、メリット2つ、デメリット2つ、自分の意見1つの計5つの論拠を求めるといふ、構造化を図った。採点は、求められる5つの論拠それぞれに0～3点を割り当てて、15点満点で2者(AETとJTE)の採点の結果を総合して評価している。採点を速やかに行うために、図5 - 0 - 6 - 3.のような答案とカセットテープの受け渡しの流れを計画的に行う必要がある。

表5 - 0 - 6 - 2 各指標の数値化と採点者の一覧

評価の指標	数値化の観点		評定者		備考
			JTE	AET	
流暢さ	a. 総語数	W = 語/15分、 S = 語/2分			
	b. 書く速度	語毎分			
	c. 話す速度	語毎分			
	d. 総文数	文/15分			
正確さ	e. 誤綴り率	誤数/総語数			ライティングのみ
	f. 誤発音率	"			スピーキングのみ
	g. 誤文法率	"			
適切さ	h. 論理性	JTE(15点) + AET(15点)=計 (30点)			

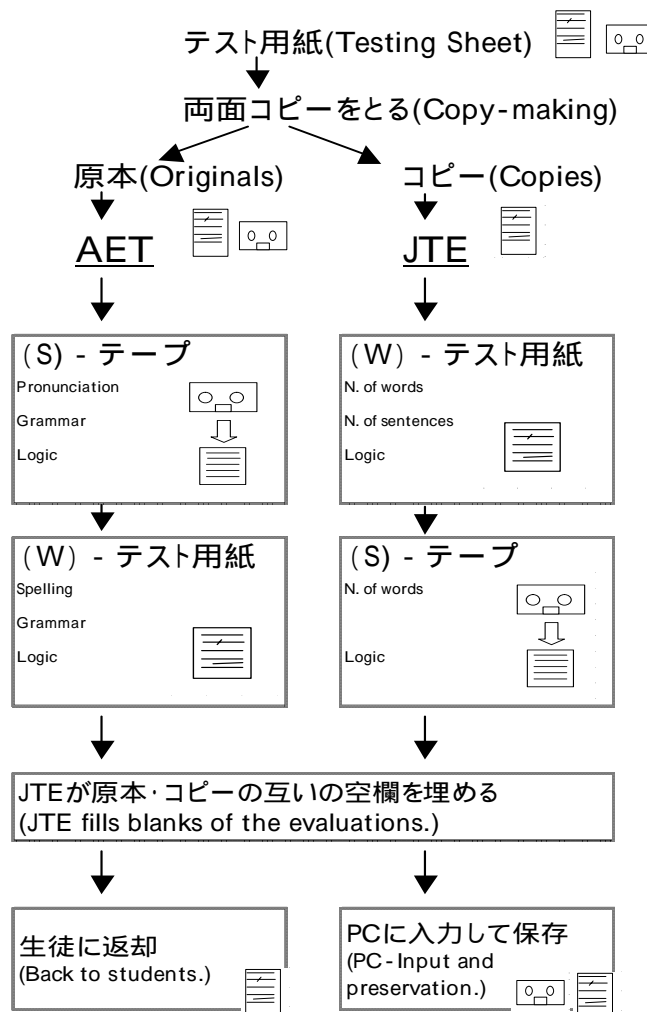


図5 - 0 - 6 - 3 . 採点の手続きシエマ

E. 「今までのところ・・・」 - WSAテストの実実施計画とこれまでの結果 -

WSAテストは表5 - 0 - 6 - 3に示される計画でこれまで5回行った。

平成16年度(第一年次)の研究では、平成16年10月と同年12月の2度のテストを実施した結果に基づいて、WSAテストの信頼性と妥当性を検証した(妥当性と信頼性の検証結果については平成16年度の研究開発実施報告書にて報告済み)。

本年度(平成17年度、第二年次)は、診断評価、形成評価、事後評価の3時点でこれを実施し、テストの結果に基づいて各評価間での指導フェーズでの指導法と学習活動の適否を検討してきた。指導法と学習活動の適否の検討は、おもにWSAテストで測定される6つの指標、すなわち2(「ライティング」・「スピーキング」)×3(「流暢さ」・「正確さ」・「適切さ」)の変化を追跡し、この変化とシラバス上の活動、すなわちS.U.P.における「イベント型」・「トレーニング型」の活動および、生徒と教師の内省に基づき、要因を推定する。

表5 - 0 - 6 - 3 WSAテストの実実施計画と研究上の位置づけ

平成一六年度	10月	1～3年 実施		～ を対比し、妥当性と信頼性を検討する
	11月			
	12月	1～3年 実施		
	1月			
	2月	1年次研究成果報告作成		
	3月			
平成一七年度	4月	1～3年 実施	2年次のベースラインとする	
	5月	【ステップアップ学習】 1. シラバス上の授業内の「学習活動」 2. 授業外の「インプット学習」と「アウトプット学習」		
	6月			
	7月	1～3年 実施	～ を対比し、指導の適否を検討する	
	8月	【ステップアップ学習】 1. シラバス上の授業内の「学習活動」 2. 授業外の「インプット学習」と「アウトプット学習」		
	9月			
	10月			
	11月	1～3年 実施		～ を対比し、指導の適否を検討し、2年次の成果を明らかにする。
	12月			
	1月			
	2月	2年次研究成果報告作成		
3月				

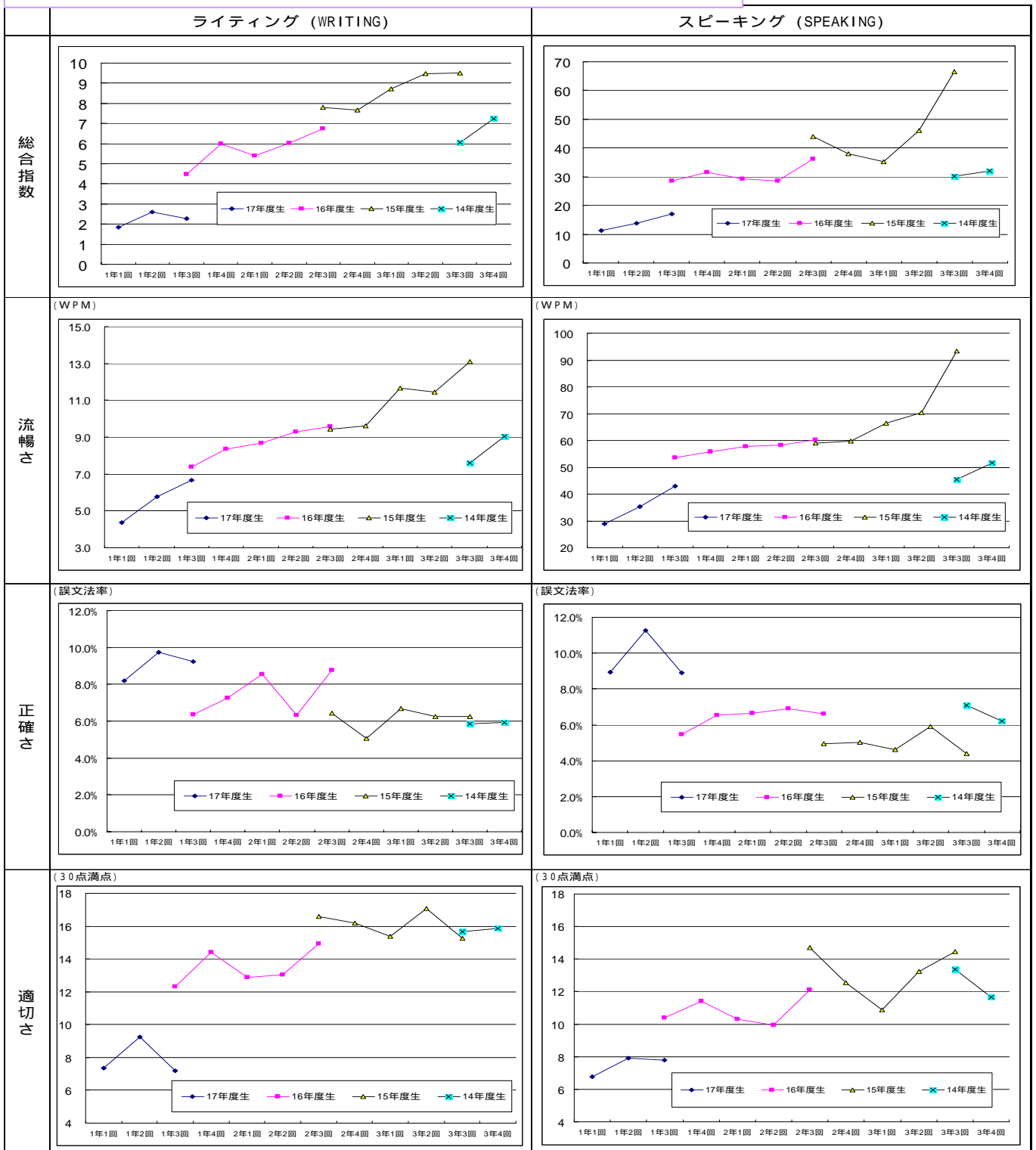
また、本年度(平成17年度、第2年次)からは、研究計画の最初から設定されてきた2(「ライティング」・「スピーキング」)×3(「流暢さ」・「正確さ」・「適切さ」)の6つの指標に加えて、ライティングとスピーキングの技量を総合的に捉えるため、新たに『総合指数』を以下のように設定した。

これまで2年間にわたるWSAテスト実施の結果として、平成14～17年度に入学した生徒のパフォーマンス変化のグラフを図5-0-6-4に呈示する。詳細の検討は次章以降で行う。

スピーキングの『総合指数』 = WPM × (1-誤発音率) × (1-誤文法率) × (適切さ/20)

ライティングの『総合指数』 = WPM × (1-誤綴り率) × (1-誤文法率) × (適切さ/20)

図5-0-6-4 . WSA テストにおけるパフォーマンスの変化



F. WSAテストによる「パフォーマンスの変化」の確認と指導内容・方法との対応

WSAテストにおける「パフォーマンスの変化」を規定する要因は、教師の指導、生徒自身の自発的な学習・練習、何らかの偶発的な経験あるいは内的な状態の変容などに分類できると思われる。

本研究開発では、こういった因果関係、すなわち上記 ~ の要因(原因)が、生徒のパフォーマンスの変化(結果)に及ぼす影響を検討する。

検討のプロセスは、まず「結果」である「パフォーマンスの変化」がどの部分で「有意」であったかを同定する。すなわち、分散を考慮した上で平均値の変化の量が有意であれば「向上した」あるいは「下降した」とし、有意でなければ「変化なし」とみなす(下・補助表群1と2を参照)。

つぎに「原因」と考えられる上記 ~ について検討する。これらの要因には以下のような前提があるので、予め留意しておく。

「教師の指導」 S.U.P.のシラバスに基づいて行われた指導。学年ごとにすべての生徒が同じ体験、同じ練習を行っているので、WSAテストの指標に基づいて統計的な手法を用いて、「有効であった指導」、「効果のあがらなかった指導」などに分類することができる。

「生徒自身の自発的な学習・練習」 基本的には生徒が授業外でとくに指示されることなく行った学習や練習。あるいは授業内であっても学習活動に対する集中度・関与度の違いによって、これに類似する影響も生じ得る。データの収集は、生徒の自己報告に頼るしかなく、またこれに至るプロセスそのものも、外的要因(生活・学習環境など)と内的要因(性格・能力など)が複雑に交叉している。したがって、本年度(第二年次)の研究開発では、この要因を中心的には扱わないが、次年度の課題として「個人差」へのアプローチを行うための基礎として考慮する。

「偶発的な経験あるいは内的な状態の変容」 量的・質的に一般化が難しいと思われるような予定外の経験や変容。エピソードとして、数値化や意義付けは難しいが、生徒の成長過程を把握するために重要であると考え、できるだけ記録し、取り上げる。

以上のように擬似的な因果関係を考慮して、指導法の適否を検討する。具体的には2つの指導フェーズを挟む3度のWSAテストにおける「パフォーマンスの変化」と指導フェーズごとの指導内容との対応関係を比較する。

表5 - 0 - 6 - 4(および下・補助表群)は、後の検討に役立つよう、独立変数 3(4月・7月・12月、被験者内)で、従属変数 3(1年生・2年生・3年生)×2(ライティング・スピーキング)×3(流暢さ・正確さ・適切さ)のそれぞれについて分散分析を行い、主効果を検討。最小有意差法(LSD)による多重比較で得られた結果と指導内容との対応を示した。

補助表群

1. 主効果の程度	
p<.01	**
p<.05	*
p<.10	†

2. パフォーマンスの変化	
LSD p<.05で向上	
LSD p<.05で下降	

3. 科目名の略記		
(オ) オール・コミュニケーション	(総) 総合英語	(コ) コミュニケーション
() 英語	(表) 英語表現	(時) 時事英語
() 英語	(異) 異文化理解	(通) 通訳演習
		(行) 学校行事

表5 - 0 - 6 - 4 「パフォーマンスの変化」と「指導内容」との対応 分散分析

FORMA TION	1年生	スキル	指標	年間の 主効果	年間の 変化	4月	第1フェーズ			7月	第2フェーズ			12月
							有意な 変化	イベント型	トレーニング型		有意な 変化	イベント型	トレーニング型	
FORMA TION	ライ ティ ング	総合指数		↑		1.9			(総)英文法演習	2.6		(オ)ジャーナルライ ティング (英)エッセイライ ティング	2.3	
		流暢さ	速度WPM	**		4.4				5.8		(行)クラススピー チコンテスト	6.7	
			語/文			9.0				8.9		(行)舟入高校スピー チコンテスト	9.6	
		正確さ	語綴率			1.2%				1.5%			0.9%	
			誤文法率			8.3%				9.9%			9.3%	
		適切さ	論拠評価	**		7.4				9.3			7.3	
	スピー キン グ	総合指数		*		11.6			(オ)1分間モノログ ()『ぎゅっと』リス ニング400問 ()音読	13.8		(行)国際交流キャン プ (行)クラススピー チコンテスト (行)舟入高校スピー チコンテスト	(オ)2分間モノログ (オ)即興スピー チ ()『ぎゅっと』リス ニング800問	17.2
		流暢さ	速度WPM	**		29.0				35.1				42.7
			誤発音率			0.4%				0.4%				0.8%
		正確さ	誤文法率			9.0%				11.3%				9.0%
			適切さ	論拠評価			6.8			8.0				7.8
		CREA TION	ライ ティ ング	総合指数		**		5.2		(表)エッセイライ ティング (行)ユーロスコラ(フ ランス)	5.7		(表)クリティカルシ ンキング (表)アカデミックライ ティング (表)パブリックスピー チ (表)プレゼンテーショ ン	(表)エッセイライ ティング
流暢さ	速度WPM			*		8.5				9.0			9.5	
	語/文					10.4				9.8			10.4	
正確さ	語綴率					1.0%				0.7%			0.8%	
	誤文法率			**		8.5%				6.5%			8.6%	
適切さ	論拠評価			**		12.7			12.7				14.8	
スピー キン グ	総合指数		**		27.4		(表)グループディス カッション (異)発音クリニック	()音読 (表)即興スピー チ (異)『ぎゅっと』リス ニング400問	27.3		(表)グループディス カッション (異)発音クリニ ック	()音読 (表)即興スピー チ (表)2分間モノ ログ (異)『ぎゅっと』リス ニング400問 (異)音読・暗誦	35.7	
	流暢さ		速度WPM			56.0				56.6				59.7
			誤発音率			0.4%				0.3%				0.6%
	正確さ		誤文法率			6.9%				6.9%				6.6%
			適切さ	論拠評価	**		10.1			9.8				12.0
	ACCE LERA TION		ライ ティ ング	総合指数				8.7		(コ)ライティングレポ ート500語 (コ)パブリックスピー チ (コ)プレゼンテーショ ン	(コ)5分間ライ ティング	9.7		(コ)5分間ライ ティング
流暢さ		速度WPM		**		11.8				11.6			13.2	
		語/文				12.0				11.7			12.3	
正確さ		語綴率				0.9%				0.8%			1.2%	
		誤文法率				6.8%				6.3%			6.4%	
適切さ		論拠評価		*		15.4			17.3				15.3	
スピー キン グ		総合指数		**		34.6		(時)(表)グループ ディスカッション	(コ)1分間モノ ログ (コ)2分間モノ ログ (総)『ぎゅっと』リス ニング400問 (時)音読 (時)ラーニング	46.8		(コ)トーキングマ ッチ (コ)ディベート (コ)グループディス カッション	(コ)1分間モノ ログ (コ)2分間モノ ログ	65.3
		流暢さ	速度WPM	**		66.3				71.0				93.2
			誤発音率			0.3%				0.6%				0.8%
		正確さ	誤文法率	**		4.7%				5.9%				4.5%
			適切さ	論拠評価	**		10.8			13.4				14.4

